



ショートコメント

★★★★★

Data 2025-102

監督：小松莊一良

出演：フジコ・ヘミング／大月ウルフ／エヴァ・ゲオルギー・ヘミング／(ナレーション) 菅野美穂

フジコ・ヘミング 永遠の音色

2025年／日本映画
配給：日活／91分

2025 (令和7) 年 10 月 31 日鑑賞

テアトル梅田

👁️👁️ みどころ

私はカラオケでは演歌からナツメロ、ニューミュージックまで何でもござれたが、クラシックも大好き。学生時代にはギターでのフォークの弾き語りに挑戦！さらにピアノだって「エリーザのために」だけは弾きたいと思って挑戦したが、さすがにそれはムリだった。

フジコ・ヘミングの名前は一風変わった名前、風貌の一風変わったおばさんピアニストとして私も知っていたが、盲目のピアニスト、辻井伸行はTV等でよく観るものの、フジコの演奏風景を観る機会はなかった。そんなフジコ・ヘミングの伝記的なドキュメンタリーが公開され、さまざまな時間のタイミングがあったため急速鑑賞！

それが大正解だった。1931 年生まれの彼女がドイツから日本に移住してきたこと、スウェーデン人の父親が日本人の母親を捨ててヨーロッパに戻ったこと、その後の彼女の多くの苦労を経てヨーロッパに留学し、ピアニストとして大成功するに至ったことを、その“波乱の人生”の中でよく理解し、納得することができた。

何よりも素晴らしいのは、そんな苦難の人生の中で、フジコが自分だけにしかできないピアノ演奏を生涯貫いたことだ。コトの成否は時の運、そして成功は長年の努力の結果として運ばれてくるもの。そんな素晴らしい 92 年の人生を全うしたフジコ・ヘミングに拍手！そして合掌！

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*

◆フジコ・ヘミング。その一風変わった名前は、一風変わった風貌の“おばさんピアニスト”として私も知っていたが、演奏会に行ったこともなければ、TVでその演奏姿を見たこともなかったから、彼女についての私の知識はゼロ。

そんな私でも、彼女が2024年4/21に92歳で亡くなったことくらいは知っていたため、本作が上映されていることを知り、たまたま時間の巡り合わせが良かったため本作を鑑

賞！「ドキュメンタリー映画だからきっと参考にはなるだろう」程度の軽い気持ちで金曜日の午前中、観客わずか数名の中で鑑賞したが、結果は大正解、そして大感激！これは観てよかった！

◆本作の監督は小松莊一良。彼は主に音楽やストリートダンスを題材にしたフィールドで活動してきたそうだから、映画監督としての“実績”は皆無に等しい。そのためか、私は彼のことは全く知らなかった。

しかし、彼はピアニスト フジコ・ヘミングのコンサートや海外CMも数多く演出し、企画監督したドキュメンタリー映画『フジコ・ヘミングの時間』（18年）が立ち見の出るロングランヒットとなり、第22回上海国際映画祭に招待されたそう。また、その後も『恋するピアニスト フジコ・ヘミング』（24年）を手掛けた上、本作でいわば「フジコ・ヘミング3部作」を完成させたそうだから、すごい。

他方、本作は『フジコ・ヘミング 40代の日記』を核として構成されているが、それを読むナレーション役は、私の大好きな女優、菅野美穂だ。私は彼女をNHKスペシャルドラマ『坂の上の雲』（09年、10年、11年）で何度も観たが、彼女は03年のスペシャルドラマ『フジコ・ヘミングの奇跡』でフジコを熱演し、高視聴率を獲得し話題となったそう。したがって、本作で彼女がナレーション役を務めたことには、私も納得！

◆私が生まれたのは戦後の1949年。そして「戦後80年」を迎えた2025年の今まで、日本は戦争を一度もしていない国だ。しかし、日本人の母、投網子と、スウェーデン生まれの父の間で1931年にベルリンで生まれたフジコは、幼い時に両親とともに日本に移住したものの、父親は7年後に妻子を残して母国に帰国し、その後は建築家などをして新たな家庭を築いたそうだから、残された母子がいかに大変な思いをしたかは想像に難くない。

本作は、そんなフジコが生きた時代状況、家族関係の中で、彼女がいかにして素晴らしいピアニストに成長していったかを丁寧に描いていくので、それに注目！

◆本作の冒頭は、フジコが父親が描いたというポスターと対面するシーンから始まる。パンフレットによれば、その父親の略歴は次頁のとおり。また、母親と弟の略歴も次頁のとおりだ。



TOAKO OHTSUKI

母 大月^{おとすき}投網子

1903年生まれ、ベルリンでのピアノ留学中に夫ジョスタと出会い結婚するが、やがて別れる。残された子どもたちを養うために、在日米軍施設などでピアノ教師として猛烈に働く。また、ハーフの子どもたちがいじめられないよう、クリスチャンの学校である青山学院に入れた。フジコがヨーロッパで生活していた時代には、弟ウルフとともに仕送りを続け、最後まで娘を支え続けた。1993年他界。

ULF GEORGII-HEMMING

弟 大月ウルフ

(ウルフ・ゲオルギー・ヘミング／大月良雄)

1934年、東京生まれ、青山学院大学卒業。フジコの3歳下の弟。幼い頃からモデルとして活動し、俳優座を経て個性派俳優として活躍。『大鉄人17』(77)、『仮面ライダードライブ』(15)など数多くの特撮テレビ番組で人気を博す。妻はバレリーナで、バレエスタジオを運営。陰ながら夫婦で不遇時代のフジコを長年サポートした。ウルフ(Ulf: 騎士)という父が名付けた名前に生涯誇りを持っていた。2020年8月他界。



GÖSTA GEORGII-HEMMING

父 ジョスタ・ゲオルギー・ヘミング

1910年、スウェーデン生まれ。若きデザイナーとして活躍。1930年にベルリン留学をしていた投網子と出会い、21歳で結婚。幼いフジコとともに日本に移住。妻の後押しで日本人の商業美術家たちとニッポン・レイアウト・グループを主宰し、ポスター作家や挿絵画家として活動。しかし、7年後に妻子を残し母国に帰国。その後は建築家などをして、新たな家庭を築く。1986年他界。母国への帰国は自らの意志ではなく、外国人排除の裁判所命令によるものだった。

◆私はモーツァルトはもとより、ショパンもリストもベートーベンも大好きだが、ピアニストとして天才的な能力を発揮したショパンもリストも、作曲したのは当然ピアノソナタが主流だ。それに対して、ベートーベンにはピアノソナタだけではなく、交響曲(1~9番)、ピアノ協奏曲(1~5番)、バイオリン協奏曲(1曲のみ)も有名だ。

他方、ピアノ演奏の素晴らしさを売り物にするピアノ協奏曲としては、何といってもラフマニノフのピアノ協奏曲第2番が有名だが、とりわけ同曲の名ピアニストとされたのが、1970年の大阪万博の時に来日したソ連のピアニスト、スヴャトスラフ・リヒテルだ。リヒ

テルは男性特有の力強く太い指のみならず、2 オクターブ分も開くという長い指がトレードマークだった。それに比べると、フジコの指は女性のものとは考えられないほど太いが、短いのでビックリ！私が大学時代に付き合っていたピアノ科の女性は、非常に指の短さに悩んでいたが、さてフジコは？

◆本作『フジコ・ヘミング 永遠の音色』は当然フジコが奏でる美しいピアノの旋律で彩られているが、本作に登場するピアノの名曲は次のとおりだ。

『月の光』

作曲：C.A. ドビュッシー

東京藝術大学卒業後、欧州への留学を夢見ていたが、留学費用のあてもなく悶々とした日々を送っていたフジコ。その頃、友人と一緒にピアノを弾くアルバイトをしていたのが、当時原宿にあった高級レストラン「福祿寿飯店」だった。アルバイト後、お店の人とみんなでおいしいご飯を食べたのが、楽しい思い出だったという。その店の客は在日米軍の将校が多く、リクエストが多かった曲が「月の光」。彼らにとって、故郷や好きな人を想う一曲だったのかもしれない。

『雨の庭』

作曲：C.A. ドビュッシー

2017年12月1日、動物愛護のチャリティー・ソロコンサート「いと小さいのちのために」（主催：ライオンズクラブ国際協会 330-A地区）を開催。会場の東京オペラシティのロビーには、病院で働くファミリードッグが来場者を出迎え、フジコは数百万円の出演料を全額寄付した。映画で使用された「雨の庭」は、このリハーサル時の映像。まさに観客はおらず、ウィーンで大きなチャンスが訪れるが悲劇に昇舞われた不遇時代のフジコの孤独と重ね合わせている。

『夜想曲（ノクターン）第1番 作品9-1』

作曲：F. ショパン

2017年12月25日、恵比寿サ・ガーデンホールで行われた、小松監督演出による一夜限りのソロコンサート L'ULTIMO BACIO Anno 17「キャンドルクリスマス」。この時の幻の記録映像が、映画の中で初公開されている。観客が手にしたLEDキャンドルの明かりに囲まれ、ステージ上には生木のクリスマスツリーやピアノを取り囲む花と緑……。幻想的で美しい演奏シーンを背景に、欧州時代の「ひとひらちちの大団円」の日記を菅野美穂が静かに朗読している。

『ちいさきいのちのために（Lacrimosa）』

作曲：助川敏弥

2016年のワールドツアーで世界を旅する中でも、犬や猫のことを片時も忘れていたフジコ。ロサンゼルス公演でマレック・シュバキエヴィッチ（チェロ）と共演したこの曲（初公開）は、東京藝術大学のクラスメイトでもあった音楽家・作曲家、助川敏弥氏の作品。助川氏が失った小さいのちへの想いを込めた楽曲を、動物愛好家のフジコが感情豊かに演奏している。ファンの間では長らく「ラクリモサ」と呼ばれていたが、この映画を機に正式名称に改められている。

『月光ソナタ』

作曲：L.V. ベートーヴェン

映画では、2023年横浜のコンサートで真っ白な衣装を身にまとい、この曲を演奏する映像と、弟による「ウルフの手記」を重ね合わせた場面が印象的だ。小松監督がウルフさんのインタビューをした時、A4用紙2枚に綴られたこの手記を手渡されたという。欧州で暮らすフジコ不在の中、母が亡くなった暗い夜のことを生忘れずに伝えたかったのだろう。長男として小さな家族を守ろうとあぐく彼の愛情に胸がしめつけられる。この手記を、俳優の四方丈 亘が朗読している。

『ラ・カンパネラ』

作曲：F. リスト

映画で使用されたのは2017年東京オペラシティの映像で、この日は本編とアンコールでなんと2回「ラ・カンパネラ」を演奏し、衣装も3回替えた。「フジコ・ヘミングの時間」のクライマックスシーンでは、デザイナー・横田晴香氏によるシルバーのドレスを着ているが、このアンコール時の衣装は普段着なのだとか。しかし、それもまた魅力的に映っている。「慈愛も感じさせる晩年の演奏とはまた違う、エネルギーで輝とした音色が、今回の映画のクライマックスに一番ふさわしいと思った」と小松監督は言う。

『ため息』

作曲 F. リスト

「フジコ・ヘミングの時間」『恋するピアニスト』『永遠の音色』3作の映画を通して、パリのシーンになる時は「ため息」から始まっている。小松監督が初めてフジコの「ため息」を聴いた時、ヨーロッパの絵（映像）が浮かんだそうで、「この曲でフジコさんを好きになった」と話すと、「男の人はみんな『ため息』が好きなのよ。ロマンチストね」と言って笑ったという。優雅でロマンティックかつドラマティックなこの曲で、映画が締めくくられる。

『愛の夢』

作曲：F. リスト

コンサートで度々披露され、代表曲のひとつであった「愛の夢」。海外での人気も高く、アンコールで弾くと満場の拍手とブラボーの声が上がったという。また、海外公演のCMでは、「ラ・カンパネラ」でなくこの曲が選ばれることも多かったそうだ。

『主よ、人の望みの喜びよ』

作曲：J.S. バッハ

この曲は、バッハが書いた200曲もの「教会カンタータ」の一曲、「カンタータ第147番 心と口と行いと生活で」終曲のコラル（讃美歌）がもとになっている。2011年ミュンヘン録音の「フジコ・ヘミング・ソ」にこの曲を収録し、その後レパートリーになったという。

『ピアノ・ソナタ 第2番 作品35 第1楽章』

作曲：F. ショパン

『奏送』の愛称で知られるソナタ第2番。第1楽章は、重々しい和音から序奏、そして暗く疾走感のある第1主題へと続く。その雰囲気は、東京の空襲が激しくなり、愛犬は軍に食用徴収され、飼っていた猫も置き去りにしたまま、疎開先の岡山に逃げ延びた当時13歳のフジコの心模様にも重なる。

『トロイメライ（夢）』

作曲：R. シューマン

シューマンが28歳の時に作曲したピアノ小曲集「子供の情景」。第7曲「トロイメライ」は特に有名で、シンプルに曲ゆえに演奏者による表現の違いも大きい。フジコが奏でるやさしい音色、ゆったりと流れるメロディに引き込まれ、夢の中にあるような感覚を味わえる。

『楽興の時 第4番』

作曲：F. シューベルト

楽興の時とは、19世紀ロマン派の作曲家による叙情的で自由な楽想を持つピアノ小品の一つの形式。最も有名なのは第3番で、「エール・リュス」（ロシア風歌曲）として、シューベルトの存命中から愛好されていた。ラフマニノフも同じタイトルの曲集を作曲している。

『ピアノ・ソナタ第2番 作品35 第2楽章』

作曲：F. ショパン

ソナタ2番の第2楽章スケルツォは、第1楽章のような暗く激しい主題から始まるが、中間部では表情が一変し、風が去った後のように柔らかな雰囲気へと変わる。映画ではこの中間部が使われている。ショパンらしい明暗の対比が際立つ一曲である。

『プレリュード ト長調 作品32-5』

作曲：S. ラフマニノフ

ラフマニノフは、作品3の2、作品23、作品32と、全ての長調・短調の24の前奏曲を作曲した。作品32-5は、左手の分散和音にのせて右手で愛らしいメロディを奏でる穏やかな曲調で、動物や自然に囲まれて安らぎの時間を過ごすフジコの日常風景が浮かんでくる。

『バルティータ 第1番 BWV825 コッレンテ』

作曲：J.S. バッハ

バッハの「イギリス組曲」「フランス組曲」と並ぶ、鍵盤楽器のための組曲集「バルティータ」。プレリュード、アルマンド、クーラント（イタリア式はコッレンテ）、サラバンド、ジークといった舞曲を標準構成として、その構成は自由に変更されている。

『別れの曲』

作曲：F. ショパン

ショパンの練習曲（エチュード）は、この曲以外にも「エオリアン・ハーブ」「木枯らし」「黒鍵」など、練習曲という次元を超え、高い芸術性を持つ名曲が数多くある。別れの曲の美しいメロディには、ショパン自身が抱いた悲しみや希望などさまざまな感情が色濃く反映されている。

『夜想曲（ノクターン）第2番 作品9-2』

作曲：F. ショパン

ノクターン第2番は、フジコが幼い時に母がよく弾いていた曲であり、晩年のコンサートでも度々披露されるなど、彼女の生涯を語る上で欠かせない一曲。この曲に代表されるように、フジコは世界中の人々が愛した名曲と呼ばれる作品をレパートリーの中心に据えていた。

『24の前奏曲 第11番 作品28』

作曲：F. ショパン

24すべての調性で作曲されたショパンの前奏曲は、第15番「雨だれ」や、胃腸薬のCM曲として知られる第7番など、印象的な小品が並んでいる。第11番は非常に短い曲だが、軽快で弾むような曲調とショパンらしい美しさあふれる作品。

『革命』

作曲：F. ショパン

ショパンの怒りや嘆きの感情が強く表れた右手のメロディが印象的だが、休むことなく動く左手のための練習曲でもある。フジコのレパートリーの中でも密かに人気が高く、小松監督はこの曲を聴くと、自分の未来を信じて孤独や不安と戦う欧州時代のフジコをイメージするという。

◆ピアノソナタとしては、山本薩夫監督の『戦争と人間』3部作（70年～73年）の導入部で、浅丘ルリ子扮する伍代由紀子が弾いていたショパンの『革命』がカッコ良い曲だし、『別れの曲』や『夜想曲（ノクターン）第2番』等のメロディも誰でもよく知っているものだ。それに対して、本作で私が大きな感銘を受けたのは、フジコが弾くリストの『ラ・カンパネラ』だ。本作で使用されたのは2017年の東京オペラシティの映像で、この日は本編とアンコールで2回『ラ・カンパネラ』を演奏し、衣装も3回着替えたそうだが、本作のクライマックスで聴く（見る）、そのカットなしの演奏シーンの素晴らしさに驚愕！これを聴いただけでも本日の映画鑑賞は大成功だ！「続けることに意味がある。今の積み重ねの先に、きっと楽しい自分が待っている。だから諦めずに人生を歩んでいこう。」と語る彼女の言葉の重みと説得力に拍手！そして急速にわかファンになった私も、フジコ・ヘミング氏の冥福を祈りたい。

2025（令和7）年11月4日記